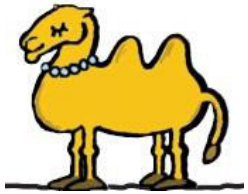
キャンパスライフ支援室

理学研究科・理学部
2021年度　第1回キャンパスライフ支援室
学生向け研修会（Student Seminar）

キャンパスライフ支援室
相談員　岩渕

キャンパスライフ支援室の紹介



＜相談員＞

- **岩渕将士**（臨床心理士）
- **菊地幸恵**（臨床心理士）

キャンパスライフ支援室は

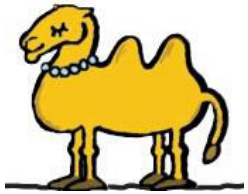
- 相談員（臨床心理士）　2名
- TA（数学・物理）　9名

の体制で学生さんの学生生活をサポートします!

「カウンセラーのいる談話室
＋アットホームな個別塾（の自習室）」
のような場所です

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

目次

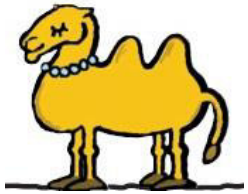


ハラスメントの知識を
学生が持つ意義

模擬事例

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

高学年ほど小コミュニティ



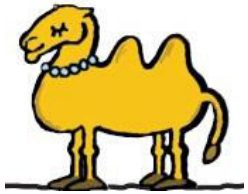
- 授業中心の生活⇒研究室中心の生活

- 学年が上がるほど・・・
  - 「身近にいる同学年の人数」が少なくなる傾向がある
  - 教員と学生の距離感は近くなる傾向がある

- 自分にとっての「当然」が、身近にいる他者の「当然」と類似するとは限らない

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

たとえば・・・

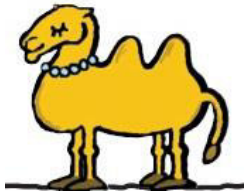


＜化学科1年生のAさんの例＞

- 有機化学に興味を持って大学に入学したが、1セメの専門科目は量子化学だった（リアリティ・ショック）。
- 図書館の本で独学で勉強するも、授業の課題が多すぎて、独学の時間が取れない（多忙な大学生）。
- クラス担任は「勉強する環境は整っている」とし言う（確かに環境はあるけれど・・・）。

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

たとえば・・・（続き）



- クラス担任が以下のような発言をしたら、学生はどう思うだろうか？

1. やりたい気持ちがあれば、授業の課題があっても勉強できるはず。あなたの努力不足では？

2. 大学生は時間があるんだから、やりたいことをやったらいい。授業の課題なんて手を抜けばいいし、そうしたら時間は作れるでしょう？

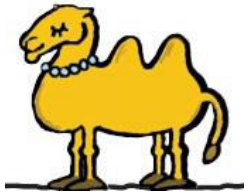
© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

コミュニケーションは相対的なもの

- ある人にとっての賞賛は、別の人にとっての侮蔑になることもある…「社会構成主義」（深尾、2005）という考え方
- 「客観的な真実」は観察不可能であり、全ての社会的活動（物事の意味）は「主観」が介在して「構成された」もの

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

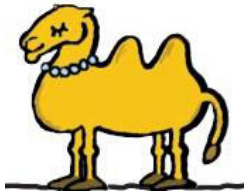
ハラスメントの知識を学生が持つ意義



- 「〇〇という行為はハラスメントだ」という白黒思考ではなく、コミュニケーション不全の結果として「ハラスメント」が生じることを理解できる。
- 「友人は許してくれるけれど、後輩は許容できないと思っている」ような行動を自分がしていないか点検できる。
- 「これってハラスメントでは？」と思う行為をされた時に、「それはハラスメントです」と主張する力を養える。

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

目次



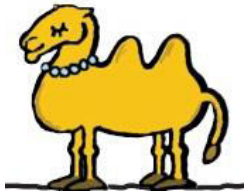
ハラスメントの知識を

本SSの趣旨

模擬事例

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

本SSの趣旨



【目的】

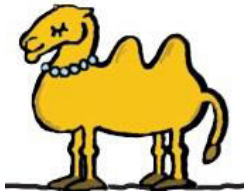
- ハラスメントにつながり得る「要注意な言動」の概要を理解し、日頃の自分の行動と比較する。

【定義】

- ハラスメント的事案：教育研究における優越的な関係を背景とした言動、または、他者を不快にさせる性的な言動であって、ハラスメントとして認定されるとは限らないもの。
- 要注意な言動：ハラスメント的事案を生じさせる可能性が高い言動。

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

本SSの趣旨



【要注意な言動を整理する意義】

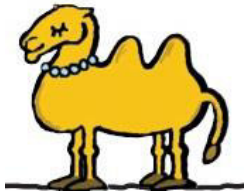
- 人間関係上のトラブルの発生を未然に防ぐ（加害者にならないことを目指す）
- 人間関係上のトラブルに直面した時の対処スキルを身に着ける（被害者になった時に対処できることを目指す）
- 自由で開かれた教育・研究環境の整備（ハラスメントのない教育・研究環境を学生と教職員が協力して作っていく）

【本SSを受けることの学生の利益】

- 自分が加害者になることを予防できる。
- ハラスメントを受けたと感じた時に早期に対処が可能になる。

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

目次



ハラスメントの知識を

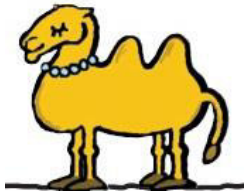
要注意な言動

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

理学版の「要注意な言動」

参考：吉武清實 (2015) キャンパス・ハラスメント防止へ「要注意の教員行動33箇条」～被害者も加害者も出さないために～　学生相談所年報, *9*, 1-18.

事前知識



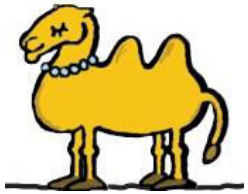
Q. 大学院（大学）は教育機関ですか？

A. 教育機関です。

- 学校教育法
  - **第一条**　この法律で，学校とは，幼稚園，小学校，中学校，義務教育学校，高等学校，中等教育学校，特別支援学校，大学及び高等専門学校とする
  - **第九十七条**　大学には，大学院を置くことができる

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

事前知識

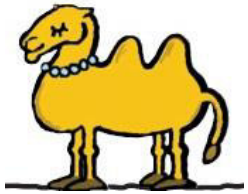


- 教育基本法
  - **第一条**　教育は，人格の完成を目指し，平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない

（ハラスメントと同様に）ハラスメント的事案は被害者的立場の者に対して強い心理的ストレスを与える。したがって，心身ともに健康な国民の育成を期す教育機関では，ハラスメントに加えてハラスメント的事案も最小限に抑えることが望ましい。

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

「要注意の教員行動33箇条」（吉武，2015）



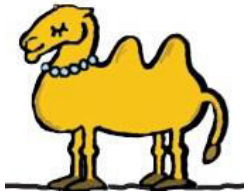
- ハラスメントの認定基準を事前に設定しておくことは難しいが、要注意の言動であれば示すことができる（吉武、2015）

- 教員は組織の運営者として，「学生が、大学での経験から、最大限の利益を得ることができるように、教育・研究の機会を提供する」(吉武、2015)役割を有する。

- 「要注意の教員行動33箇条」は学生にも共有した方がよいものである（吉武、2015）

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

「要注意の教員行動33箇条」（吉武，2015）



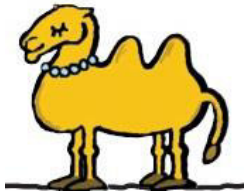
- ハラスメントの認定基準を事前に設定しておくことは難しいが、要注意の言動であれば示すこ

「要注意の教員行動」と
理学における相談事例を元に
理学版の「要注意な言動」を
まとめました。

- 「要注意の教員行動33箇条」は学生にも共有した方がよいものである（吉武、2015）

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

要注意の言動（理学版）



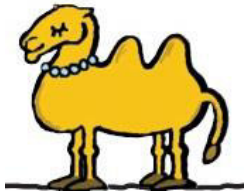
＜放任主義・無責任＞

1. 研究指導が不十分，または研究指導せず放置される
（例：学生の主体性を養うことと研究指導を放任することがないまぜになっている；学生が困った時に誰に相談したらよいか不明瞭；困った時に相談してみるが『他の人に聞いて』と言われるばかり；定期的に進捗報告する時間を設けてもらえない）

2. それまでは何も言わなかったにも関わらず，卒業・修了直前の時期になってから「あと1年必要」と言われる（特に留学生や社会人学生にとっては大きな問題に発展することもある。また，一般に経済的に余裕のある学生は少ないため，標準在学年限での卒業・修了が難しい場合には可能な限り早めに伝えることが望ましい）

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

要注意の言動（理学版）



＜コミュニケーション不足＞

3. 研究指導や相談をする度に言うことが変わる（と学生には思われる）

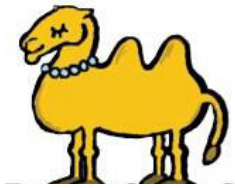
4. 指導教員から言われた通りにやったにもかかわらず，注意される（と学生には思われる）

5. 研究テーマに都合の良い結果しか見ない，都合の悪いデータは学生の技術・知識不足と言われる

6. 教員が期待する意見を言わないとセミナーが終わらない，教員の言う通りにしないと叱責される，学生のアイデアをいくら言っても聞く耳を持ってもらえない

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

要注意の言動（理学版）



＜攻撃的・高圧的な言動＞

7. とてもこなせない量の課題が出される（例：既に夜遅いにもかかわらず，明日の午前10時までに資料をまとめてくるように言われる）

8. 人格否定の言葉を言われる（例：これくらい中学生でも分かる）

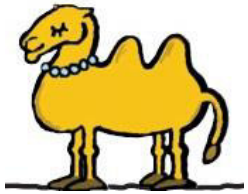
9. （感情的に）なじる・怒鳴る（例：こんなこともできないのか，やる気がないなら大学を辞めてくれ）

10. 存在否定の言動（例：もう研究室に来なくていい，そんなんじゃ将来どこにも雇ってもらえない）

11. 進路選択の妨害（例：他大学院への進学を認めない，学生に不利になる推薦書を書く，学生の進学・就職先にネガティブ・キャンペーンを行う）

12. 自分の非は認めないが，学生が同じことをした際には謝罪するまで許さない

要注意の言動（理学版）



＜教育研究環境の悪化＞

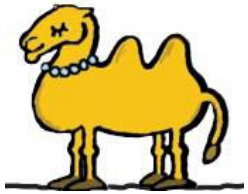
13. 研究室内の交流を制限し，孤立させる（例：お気に入りの学生が自分が嫌いな学生・スタッフと仲良くしているを不機嫌になる）

14. 他の研究室メンバーがいる場で，名指しで注意する
（他の学生等がいる場で注意しないといけない必然性はあるのか）

15. 本人がいない場で研究室メンバーに悪口を言う（それを聞いた学生は，自分のことも陰で悪く言われていると思うかもしれない；仮に事実を客観的に述べているつもりでも，本人の社会的信用を貶める言葉は悪口として受け取られる可能性が高い）

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

要注意の言動（理学版）



＜教育研究環境の悪化＞

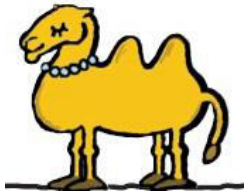
16. 他研究室のことを悪く言う（仲の良い友人が悪く言われた研究室に所属しているかもしれない）

17. 性別，出身地，人種，宗教等に関わる差別的言動をする。または，そうした言動をする学生を注意をしない（こうした言動はハラスメントとして認定される可能性すらある）

18. 研究室内の対人トラブルを放置する，不適切な言動を繰り返す学生を注意しない（例：必ずしも研究に対して意欲的でない学生もいるが，そうした学生に対して，研究に意欲的な学生が言語的・非言語的にバッシングする（ように見える・聞こえる）事態を放置する）

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

要注意の言動（理学版）



＜倫理観の不足＞

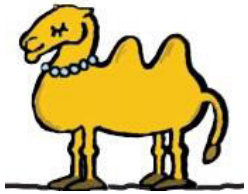
19. 過度に期待を持たせる発言をする（例：うちの研究室なら絶対学振が取れる；GP等の学内プログラムに必ず合格させるから博士課程進学をすべき）

20. 研究に関わっていない（と思われる）人も共著者に含めるように要求する（コミュニケーション不足で生じることも）

21. 個人情報保護の意識が低い（例：研究室のWebページ問題；ある学生のプライベートな情報を他学生に話してしまう（LGBTQ+のアウティングはもちろん，学生の実家や家族に関する情報も守秘義務の範囲内にあると捉えた方が安全）；学生の個人的な事情はなるべくメールでやり取りしない，GメールとGドライブをうまく組み合わせるとメールのみより安全性は高いか）

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

要注意の言動（理学版）



<公私混同の言動>

22. 大学のメールアドレスではなく，個人のメールアドレスやSNS等で（私的な）連絡をする

23. 学生の家まで送り迎えをする，私的な用事を学生にさせる

24. 飲み会の場で接待をさせる（特に女子学生に対して，研究室主宰者や外部から招待したゲストの近くに座るようにしむける）

25. 学生と2人きり，もしくはごく少人数で食事や飲み会を繰り返し行う（良識に照らして了解される範囲内でも疑わしいことは避けた方が安全）

26. （異性の）学生のちょっとした言動から，自分に好意があると捉える（勘違いからストーカー行為に発展することもある。学生同士でこうした問題が生じた場合，指導教員だけでなく学科長・専攻長が対応する場面も出てくる）

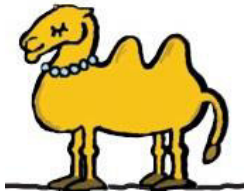
目次

ハラスメントの知識を

模擬事例

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

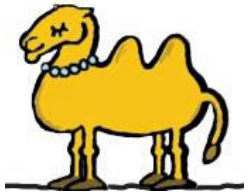
研究指導が不十分な模擬事例



　指導教員のA先生は学内外の業務等で非常に多忙であり，研究室の学生達はA先生に相談しづらいことが常態化していた。元から研究への意欲が低かった指導学生のBさんは，研究室配属時に「毎日大学に来ていれば卒業できるから」とA先生から言われたこともあり，院試の勉強を研究室で毎日していた。辛うじて院試に合格したBさんだったが，A先生からそれまでの研究の進捗を聞かれ，研究室配属時からほぼ何も進んでいないことが明らかとなった。A先生から「このままでは卒業させられない，この半年何をやってきたのか」と叱責されたBさんは不登校になってしまった。

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

研究指導が不十分な模擬事例



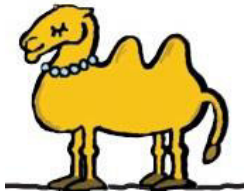
　指導教員のA先生は学内外の業務等で非常に多忙であり，研究室の学生達はA先生に相談しづらいことが常態化していた。元から研究への意欲が低かった指導学生のBさんは，研究室配属時に「毎日大学に来ていれば卒業できるから」とA先生から言われたこともあり，院試の勉強を研究室で毎日していた。辛うじて院試に合格したBさんだったが，A先生からそれまでの研究の進捗を聞かれ，研究室配属時からほぼ何も進んでいないことが明らかとなった。A先生から「このままでは卒業させられない，この半年何をやってきたのか」と叱責されたBさんは不登校になってしまった。

＜ここまでの要注意な言動＞

- 研究指導が不十分

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

研究指導が不十分な模擬事例



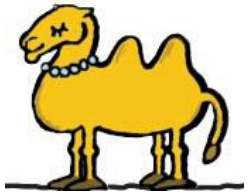
　指導教員のA先生は学内外の業務等で非常に多忙であり，研究室の学生達はA先生に相談しづらいことが常態化していた。元から研究への意欲が低かった指導学生のBさんは，研究室配属時に「毎日大学に来ていれば卒業できるから」とA先生から言われたこともあり，院試の勉強を研究室で毎日していた。辛うじて院試に合格したBさんだったが，A先生からそれまでの研究の進捗を聞かれ，研究室配属時からほぼ何も進んでいないことが明らかとなった。A先生から「このままでは卒業させられない，この半年何をやってきたのか」と叱責されたBさんは不登校になってしまった。

＜ここまでの要注意な言動＞

- 研究指導が不十分
- 以前言っていたことと違うことを言う（コミュニケーション不足）

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

研究指導が不十分な模擬事例



　指導教員のA先生は学内外の業務等で非常に多忙であり，研究室の学生達はA先生に相談しづらいことが常態化していた。元から研究への意欲が低かった指導学生のBさんは，研究室配属時に「毎日大学に来ていれば卒業できるから」とA先生から言われたこともあり，院試の勉強を研究室で毎日していた。辛うじて院試に合格したBさんだったが，A先生からそれまでの研究の進捗を聞かれ，研究室配属時からほぼ何も進んでいないことが明らかとなった。A先生から「このままでは卒業させられない，この半年何をやってきたのか」と叱責されたBさんは不登校になってしまった。

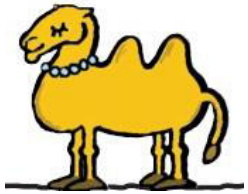
＜ここまでの要注意な言動＞

- 研究指導が不十分
- 以前言っていたことと違うことを言う（コミュニケーション不足）
- （言葉の伝え方によっては）攻撃的と受け取られる言動

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

とは言え，ここからどう対応するか
が重要

研究指導が不十分な模擬事例



（A先生の事後対応）

A先生はBさんの親と連絡を取り，なんとかBさんは研究室に復帰した。放っておくと何もしないと思ったA先生は，Bさんに対して具体的に論文名を伝え，来週までにその論文を読んで内容をまとめてくるように伝えた。

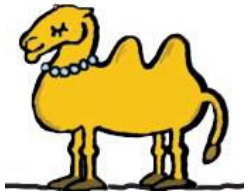
翌週，Bさんは研究室に来たものの「何もできませんでした」としか言わない。『何もできなかったわけがないだろう』とA先生から聞くと，Bさんは泣き始めてしまった。

- A先生の対応は，一見すると問題なさそうだし，むしろ丁寧な対応をしたように思われる（かもしれない）。

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

A先生の対応を吟味する

研究指導が不十分な模擬事例



（Bさんサイドから見てみると）

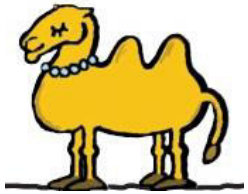
親から「大学くらい卒業しなさい」と強く叱責され，逃げ場がなくなったＢさんは意を決して研究室に復帰した。しかし，研究への意欲は急には出てこない。

また，A先生が指定した論文は自宅では読めなかった。大学に行きたくないため，そのまま数日が経過。セミナーまであと2日しかない日になり，論文のダウンロードだけでもしようと大学に行ったが，先輩から冷ややかな目で見られている気がする。逃げるように帰宅したが，論文は英語で20ページもあり，とても今から取り掛かっても読み終わるわけがない。

「もうダメだ」と頭が真っ白になり，寝ることもできず，そのまま朝になった。セミナー当日，意識がもうろうとする中，とりあえず研究室に行くだけ行くことにした。

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

研究指導が不十分な模擬事例



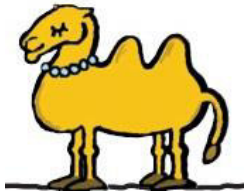
（A先生の事後対応）

　A先生はBさんの親と連絡を取り，なんとかBさんは研究室に復帰した。放っておいては何もしないと思ったA先生は，Bさんに対して具体的に論文名を伝え，来週までにその論文を読んで内容をまとめてくるように伝えた。翌週，Bさんは研究室には来たものの「何もできませんでした」としか言わない。『何もできなかったわけがないだろう』とA先生から伝えると，Bさんは泣き始めてしまった。

- A先生の対応は，一見すると問題なさそうだし，むしろ丁寧な対応をしたように思われる（かもしれない）

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

研究指導が不十分な模擬事例



- 親への連絡
  - 親に連絡することが必ずしも悪いことではない。

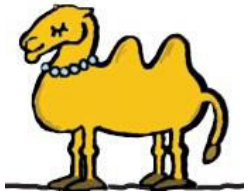
・・・ただし・・・

  - 親が必ずしも学生に対して理解を示すわけではない。親子関係が不良だと学生を追い詰めることも。
  - 親に連絡する際は，（可能な限り）事前に学生に伝えた方が安全。その際，学生が確認すると推測される方法で連絡する努力をしたい。

➢ メールを見ない学生は（思ったより）多い

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

研究指導が不十分な模擬事例



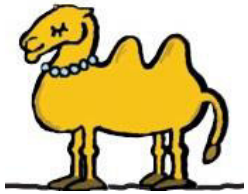
（A先生の事後対応）

　A先生はBさんの親と連絡を取り，なんとかBさんは研究室に復帰した。放っておいては何もしないと思ったA先生は，Bさんに対して具体的に論文名を伝え，来週までにその論文を読んで内容をまとめてくるように伝えた。翌週，Bさんは研究室には来たものの「何もできませんでした」としか言わない。『何もできなかったわけがないだろう』とA先生から伝えると，Bさんは泣き始めてしまった。

- A先生の対応は，一見すると問題なさそうだし，むしろ丁寧な対応をしたように思われる（かもしれない）

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

研究指導が不十分な模擬事例



- 論文を読むことの心理的ハードル
  - これくらい学生がすべき，という議論は不登校（傾向）の学生には時期尚早だろう。
  - 「べき」論ではなく，可能そうな範囲を探るからこそ「相談する」意味がある。

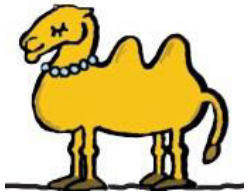
・・・ただし・・・

  - 自分にも「できた」という経験が蓄積すると，学生が自ら取り組もうと思える範囲が広がっていく。

➢ 時間はかかるかもしれないが，学生が復帰できると信じてみることから始めたい

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

研究指導が不十分な模擬事例



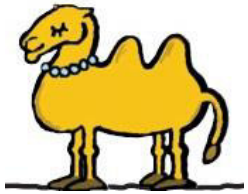
（A先生の事後対応）

　A先生はBさんの親と連絡を取り，なんとかBさんは研究室に復帰した。放っておいては何もしないと思ったA先生は，Bさんに対して具体的に論文名を伝え，来週までにその論文を読んで内容をまとめてくるように伝えた。翌週，Bさんは研究室には来たものの「何もできませんでした」としか言わない。『何もできなかったわけがないだろう』とA先生から伝えると，Bさんは泣き始めてしまった。

- A先生の対応は，一見すると問題なさそうだし，むしろ丁寧な対応をしたように思われる（かもしれない）

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

研究指導が不十分な模擬事例



- 肯定形の言葉をなるべく使いたい
  - できなかったことではなく，できたことを確認する。
  - すぐに出てこないとしても，聞き方を変えればやったことが出てくることもある。

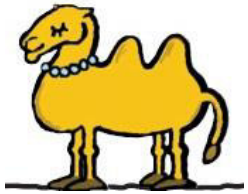
・・・その際のポイント・・・

  - 学生が抱えている不安の高さを想像する。

➢ 現代の大学生は多様な怖れ（例：将来，人間関係，自己存在）にさらされている

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

まとめ



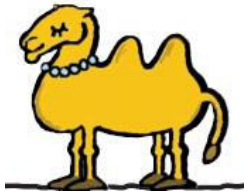
- 「要注意な言動」（理学版）は絶対的な基準を意図したものではありません。参考資料として位置付けてください。

- コミュニケーションはお互いの個人的な要因や環境要因によって「適切な方法」が変動します。模擬事例で示した問題やその対処法が，全ての人に当てはまるわけではない点に留意してください。

- 教職員と学生が互いに独自の価値観を持つ存在として認め合うことで，ハラスメント的言動の少ないキャンパスライフが実現します。

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

ご清聴ありがとうございました



学生の対応でお困りの際には
学内の学生相談機関にお問い合わせください。

【キャンパスライフ支援室】　※いずれも[at]→@に変換してください。

- Tel: 022-795-6706
- E-mail: soudan [at] mail.sci.tohoku.ac.jp
- Web: https://www.sci.tohoku.ac.jp/campuslife/

【学生相談所】

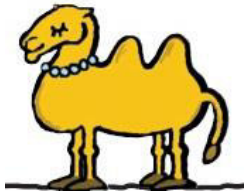
- Tel: 022-795-7833
- E-mail: gakuso [at] ihe.tohoku.ac.jp
- Web: http://www.ccds.ihe.tohoku.ac.jp/front/counseling_office/

【特別支援室】

- Tel: 022-795-7696
- E-mail: t-sien [at] ihe.tohoku.ac.jp
- http://www.ccds.ihe.tohoku.ac.jp/front/disability_services_office/

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University

参考資料



- 東北大学におけるハラスメント防止の取り組み
  - 国立大学法人東北大学におけるハラスメントの防止等に関する規定
  - ハラスメント問題解決のためのガイドライン
  - ハラスメント防止と解決のために（リーフレット）
    - 日本語版
    - 英語版

- 職場におけるハラスメントの防止のために
  （厚生労働省）

© Campus life Support Office, Faculty of Science, Tohoku University